シルバー・バーデット「Making Music」カリフォルニア版の教師用指導書において《かえるのがっしょう》はどのように扱われているか

－日本の教師用指導書との比較を通して－

宮下俊也
（奈良教育大学音楽教育講座）
宇野加奈子
（奈良教育大学学校教育教員養成課程身体・表現コース音楽教育専修学生）

A comparative Analysis of Japanese Teacher's Manuals for Music and Silver Burdett's "Making Music" Teacher's Book, California Edition, using "Kaeru no uta"

Toshiya MIYASHITA
（Department of Music Education, Nara University of Education）
Kanako UNO
（Student, Physical & Artistic, Teacher Training Division, Nara University of Education）

要旨：本稿は、日本とカリフォルニア州の音楽授業比較研究における第２段階の研究結果である。すでに第１段階として終了したカリフォルニア州のカリキュラム「California Music Content Standards」の分析に引き続き、そのカリキュラムと授業実践をつなぐ教科書の内容を分析して、カリキュラムが実践に求める具体的内容や方法を明確に把握することがこの第２段階の目的である。この結果を受けて、それがどのように実際の授業で実践されるかを検証する第３段階へと続く。取り上げた教科書は、シルバー・バーデット社の『Making Music』カリフォルニア版（2008）教師用指導書で、『Making Music』と日本のすべての教科書に共通して掲載されている教材曲《かえるのがっしょう》を扱う単元について比較検討した。その結果、音楽概念をベースとした演奏技能の教授、音楽活動を通した音楽と関連する他教科領域の概念学習とその方法を含んだ合理的な単元構成が日本との相違として明らかになった。

キーワード：シルバー・バーデット Silver Burdett、『Making Music』、
音楽授業比較　Comparing the Music Lesson、《かえるのがっしょう》“ Kaeru no uta ”

１．はじめに　－本研究の目的と本稿の位置－

音楽科実践学研究において、授業実践レベルの国際比較研究は緒についたばかりである[1)]。授業実践を比較するということは、授業における教授・学習過程を切り出して方法や教材を比較するだけではなく、各国（あるいは州）のカリキュラムやその理念となる哲学がどのように実践化されているのかという視点を共通項として比較検討していくことが必要となる。

本研究は、先に国立教育政策研究所が分析・紹介した「米国カリフォルニア州の音楽カリキュラム」（California Music Content Standards、以下、CMCS）[2)] のコンテンツが、どのように授業実践されているのか、また、CMCSは具体的にどのような授業実践を求めているのかという関心を動機とする。それを探るには、CMCSの分析とCMCSを実践に導く教科書の分析、そしてカリフォルニア州（以下、加州）の様々な教師による数多くの授業を分析することが適当な方法であると考えた。また日本の授業と比較する場合においても同様に、学習指導要領とCMCSの比較、教科書の比較、そしてそれを経て、日本の多くの授業から帰納された方法論と加州のそれとを比較する3段階をなさなければならないと考えた。

よって本研究は、この比較の３段階を遂行するものとして計画された。その中で、教科書比較と授業比較においては、比較の視点を焦点化させるために、扱われる教材を統一した。その教材として、日本のすべての小学校音楽教科書に掲載され、かつ、加州の約60%の学校が用いているシルバー・バーデット社（Silver-Burdett）の音楽教科書『Making Music』カリフォル

ニア版（2008）[3] にも掲載されている《かえるのがっしょう》[4] に着目した。よって、日本と加州において、《かえるのがっしょう》を用いる学習指導の内容は、教科書ではどのように示され、授業ではどのように実践されるのかを明らかにすることが、この第２段階と第３段階の定式化された目的である。

本稿はその中の第２段階にあたる、教科書における《かえるのがっしょう》の扱われ方についての比較分析結果を提出するものである。

２．方　法

教科書は教師用指導書を用いて分析する。日本は教育芸術社刊『小学生の音楽２　指導書　研究編』2004年度版（以下、教芸）[5]、東京書籍刊『新編　新しい音楽２　教師用指導書　研究編』2004年度版（以下、東書）[6]、教育出版刊『小学音楽　音楽のおくりもの２　教師用指導書　研究編』2004年度版（以下、教出）[7]、加州は前述した『Making Music』のGrade K、2008年版のTeacher's Edition（以下、「Making Music」）[8] を分析する[9]。

まず、「Making Music」と日本の音楽教科書を構成の点から簡単に概観する。続いて、両者において《かえるのがっしょう》《Kaeru no uta》の指導が、どのような内容をどのような方法で行うように求められているかを抽出し、指導内容や学習活動内容等の項目ごとに併記した一覧表を作成する。その表に基づき比較検討する。また特に「Making Music」の検討においては、その解釈の的確性を担保するため、筆者宇野が加州公立学校のSomis Union Schoolにおいて「Making Music」に準拠した《Kaeru no uta》の授業を試み[10]、その授業を構成する過程で受けた同校音楽科教諭による「Making Music」の解釈も加える。

３．結　果

３．１．　構成の比較

３．１．１．　「Making Music」の構成

《Kaeru no uta》は、「Making Music」の幼稚園（Grade K、以下、K）版にある。その表紙をめくると、まっさきにKのCMCS一覧がある。続いて本書の構成が示され、そこにはKから６（６年生）までのユニット（＝単元）の構成が一覧に掲げられている。ユニットはどの学年も12本で構成されており、それぞれユニット名が付されている[11]。また、ユニット１～ユニット６は「音楽づくりへのステップ」（「Step to Making Music」）として、音楽の諸要素（Elements）と技能（Skills）をベースとする学習[12]、ユニット７以上が「音楽づくりへの道」（「Path to Making Music」）としてテーマをベースとする学習になっており、学年ごとにテーマがユニットに付されている[13]。また、各ユニットは９～12のレッスンで構成されており、ユニットごとにそれぞれのレッスン内容の概略（Unit at a Glance）を一覧表にまとめて示している。その表の縦軸には各レッスン、横軸にはそのレッスンで扱う「諸要素」、「技能」、「関連事項」（Connections）、「音楽と他教科」（Music and Other Literature）、「評価」（Assessment）の５項目が並んでいる。

各レッスン部分は見開き２ページとなっており、その冒頭には、そのレッスンで扱う「重点要素」（Element Focus）、「技能の目標」（Skill Objective）、「関連内容の活動」（Connection Activity）、「教材」（Materials）、「学習する語彙」(Vocabulary)、「対応するCMCS」、「補充教材」（More Music Choices）を枠で括って要点的に示している。見開きの中央部には子どもが持つ教科書の縮小コピーが掲げられ、それを取り囲むように、そこで行う学習活動が、１．導入（Introduce）、２．展開（Develop）、３．まとめ（Close）として具体的に示されている。また見開きの下部には「Footnotes」として補充的な内容（「Skills Reinforcement」や「Building Skills Through Music」）、教師へのアドバイス（「Teacher to Teacher」）、コラム的な内容（「Spotlight On」）が記されている。

３．１．２．　日本の教師用指導書の構成

日本の３社の教師用指導書はどれも概ね、一題材（＝単元）ごとに、指導の要点を挿入した児童用教科書のコピー、題材構成の例、指導計画あるいは展開の例、指導のための解説、教材曲の解説、資料で構成されている。またそれぞれの書の冒頭部分に、各題材で扱う教材とそれに関連する学習指導要領「２．内容」の各項目の要点とをクロスさせたマトリックスを示している。

３．１．３．　構成における相違

大きな相違点は２つある。第１は、授業構成を示す点で、「Making Music」はそこに書かれていることをそのまま実践すればよいように要点的に記述されている。あれやこれやとページを括って授業を構想する必要はなく非常に合理的にできている。一方、日本の教師用指導書は、そこに示している題材構成や授業プランは教科書会社が作成した「例」であり、教師はそれを参考にしたり、資料として掲げられている事項を読んだりしながら各学校の実態に合わせて計画し、実践しなければならないことになる。

第２は、「Making Music」は指導内容や学習活動がCMCSのどれに対応するものなのかが常に意識されるように編集されている点である。対応する箇所にはCMCSの番号が付され、特に強く関連するものには鍵マークが付いている。

一方日本では、冒頭部分のマトリックスによって学習指導要領との対応をその都度見る必要がある。

３．２．　内容の比較

次に「Making Music」において《Kaeru no uta》が扱われているレッスンと、日本の３社において《かえるのがっしょう》が扱われている学習次に記されている内容を、項目ごとにまとめて表1に示す。以下、その項目に沿って述べる。

３．２．１．　扱う学年

「Making Music」では幼稚園（５歳～６歳児）、日本では小学校２学年で扱われている。

３．２．２．　タイトル

「Making Music」では、《Kaeru no uta》を扱うレッスンはユニット７「アメリカの音楽づくり」（「America Makes Music」）の「私に関するすべて」（「All About Me」）の中にあり、「Gwa! Gwa! Ribbit! Ribbit!」というレッスンタイトルが付けられている。このタイトルは子どもの教科書にも記されている。一方、日本では《かえるのがっしょう》を含む題材名は、教芸、東書、教出それぞれ「ドレミであそぼう」、「がっきランドの　たんけん」、「わくわくリズム　なかよしドレミ」であり、子どもの教科書ではそれぞれ、「２つの くみに わかれて えんそうしましょう」、「さあ がっそうしよう」、「歌や 楽器で おいかけっこを しよう」となっている。日本では、子どもはそのタイトルから学習内容がわかるようになっているが、「Making Music」ではタイトルからはわからず、教科書に小さく書かれている「Singing」でそれがわかるようになっている。

３．２．３．　時間

「Making Music」には記載がない。日本は４ないし５時間である。

３．２．４．　指導内容

「Making Music」では、音楽の諸要素は「リズム」、技能は「歌唱」、関連事項は「科学」が指導内容となっている。きわめて明確である。

日本は、このように明確には示されていないが、あえて題材の目標や学習活動から指導内容を抽出してみれば、教芸は「旋律」「拍」「旋律と旋律の関わりあい」、東書は「旋律」「伴奏と旋律の関わりあい」「旋律と旋律の関わりあい」、教出は「旋律」「音色」「音の重なり」になろうか。

３．２．５．　CMCS及び学習指導要領との対応

表１のように、「Making Music」のレッスン５において鍵マークが付くCMCSは、2.2「記憶を辿って年齢にふさわしい歌を歌う」（Sing age-appropriate songs from memory.）と、2.3「拍、テンポ、強弱、旋律の方向性を認識したことを、楽器を演奏したり、動いたり、言葉で表したりする」（Play instruments and move or verbalize to demonstrate awareness of beat, tempo, dynamics, and melodic direction.）である。また鍵マークはついていないが副次的に関連するものが、2.4「声や教室にあるいろいろな楽器を使って、伴奏を創る」（Create accompaniments, using the voice or a variety of classroom instruments.）、3.1「日常の体験の中で、音楽のいろいろな使われ方がわかる」（Identify the various uses of music in daily experiences.）、4.1「ある特定の音楽について、その音楽に合った動きを創造する」（Create movements that correspond to specific music.）である。

一方、日本の教師用指導書は、３社とも《かえるのがっしょう》という曲が、学習指導要領のどの内容を実現できる教材であるか、という情報を与えている。題材で行う活動や内容ではなく、教材と関連させている点が特徴的である。その結果は表1の通り。

３．２．６．　目標

「Making Music」においてレッスン５の「目標」（objective）として掲げられているのは「技能の目標」（Skill Objective）のみである。そしてこの「技能の目標」は「リズムパターンを正確に演奏すること」（Sing a rhythmpattern accurately）の１点である。つまり、諸要素の知覚や反応も、関連内容の獲得も、すべて技能に収斂させてそれをゴールとして見る考え方といえる。

日本も、階名唱や旋律楽器による演奏、輪唱奏などの技能が求められているが、「感じ取る」（教芸）や、「親しむ」（東書）、「楽しむ」（教出）といった感受や態度についての目標が掲げられている点が「Making Music」にはない特徴である。

３．２．７．　学習活動

「Making Music」も日本も、学習活動内容は具体的に示されている。「Making Music」では、導入で、かえるの鳴き声を聴いたり聴き比べたりするための聴覚を使った活動を行い、かえるには様々な鳴き声があることや日本とアメリカのかえるの鳴き声の違いに注目させている。これは指導内容の「関連事項」にある「科学」に対する活動（Activity）に対応する。

展開では大きく２つの活動をさせている。１つは、後半４小節のリズムパターンの知覚とそれを手や楽器でたたくことの技能、もう１つは全体を正しいリズムで歌うことである。前者においては、「日本ではかえるはゲロゲロゲロゲロ グワッグワッグワッと鳴くんだよ」と教師が言い、そのリズム感をもとに最後の２小節のリズムパターンをCD演奏に合わせて唱えたりたたいたりさせ、続いてCDなしでゆっくりたたき、最後はクラスメートの歌と一緒に楽器でたたけるようにさせている。またその知覚においては、リズムパターンがわかったら手を挙げさせて確認するように指示している。後者では、前半４小節の山型の旋律線を手で描くことによって知覚させ、その後、英語で歌われるCDと日本語で歌われるCDに合わせて歌わせている。後半４小節のリズムパターンがたたけるようになり、その上で全体を歌うという流れができている。そしてまとめ

表１「Making Music」における《Kaeru no uta》と日本の教師用指導書における《かえるのがっしょう》

	「Making Music」			教育芸術社	東京書籍	教育出版
学年	Grade K			第２学年	第２学年	第２学年
タイトル	**ユニット名**：America Makes Music **テーマ**： All About Me **レッスンタイトル**：Gwa! Gwa! Ribbit! Ribbit!			**《かえるのうた》を扱う学習次のタイトル**： 「２つの くみにわかれて えんそうしましょう」 （題材名：「ドレミであそぼう」）	**《かえるのうた》を扱う学習次のタイトル**： 「さあ がっそうしよう」 （題材名：「がっきランドの　たんけん」）	**《かえるのうた》を扱う学習次のタイトル**： 「歌や 楽器で おいかけっこを しよう」 （題材名：「わくわくリズム　なかよしドレミ」）
時間	（記載なし）			全14時間中４時間	全12時間（予備２時間を含む）中４時間（予備１時間を含む）	全８時間中２時間
指導内容	**諸要素** （Elements）	**技能** （Skills）	**関連事項** （Connections）	（記載なし）	（記載なし）	（記載なし）
	リズム **概念**:リズムパターン **焦点**:リズムパターン **副次的な要素**:音色－身の回りにある音の音色。	**歌唱** **副次的な技能**:演奏－楽譜を読み取って正確にリズムパターンを演奏すること。	**科学** かえるの鳴き声を聴いたり聴き比べたりするための聴覚を使った活動。			
CMCS・学習指導要領との対応	**対応するCMCSの内容**			**対応する学習指導要領の内容**	**対応する学習指導要領の内容**	**対応する学習指導要領の内容**
	キーとなるコンテンツ： 2.2 記憶を辿って年齢にふさわしい歌を歌う。 2.3 拍、テンポ、強弱、旋律の方向性を認識したことを、楽器を演奏したり、動いたり、言葉で表したりする。 **副次的に関連するコンテンツ**： 2.4 声や教室にあるいろいろな楽器を使って、伴奏を創る。 3.1 日常の体験の中で、音楽のいろいろな使われ方がわかる。 4.1 ある特定の音楽について、その音楽に合った動きを創造する。			A表現 (1)イ 階名で模唱や暗唱をしたり、リズム譜に親しんだりすること。 (2)イ 拍の流れやフレーズを感じ取って、演奏したり身体表現をしたりすること。 (2)ウ 互いの歌声や楽器の音、伴奏の響きを聴いて演奏すること。	A表現 (1)ア 範唱や範奏を聴いて演奏すること。 (1)イ 階名で模唱や暗唱をしたり、リズム譜に親しんだりすること。 (2)ア 歌詞の表す情景や気持ちを想像して表現すること。 (2)イ 拍の流れやフレーズを感じ取って、演奏したり身体表現をしたりすること。 (2)ウ 互いの歌声や楽器の音、伴奏の響きを聴いて演奏すること。 (3)イ 身近な楽器に親しみ、簡単なリズムや旋律を演奏すること。 (4)ア リズム遊びやふし遊びなどを楽しみ、簡単なリズムをつくって表現すること。	A表現 (1)ア 範唱や範奏を聴いて演奏すること。 (1)イ 階名で模唱や暗唱をしたり、リズム譜に親しんだりすること。 (2)ア 歌詞の表す情景や気持ちを想像して表現すること。 (2)イ 拍の流れやフレーズを感じ取って、演奏したり身体表現をしたりすること。 (2)ウ 互いの歌声や楽器の音、伴奏の響きを聴いて演奏すること。 (3)ア 自分の歌声及び発音に気を付けて歌うこと。 (3)イ 身近な楽器に親しみ、簡単なリズムや旋律を演奏すること。
目標	**技能の目標**(Skill Objective)： ・リズムパターンを正確に演奏すること。			**《かえるのうた》を扱う学習次のねらい**： ・拍の流れに乗って、旋律を階名唱したり旋律楽器で演奏したりする。 ・２つの組に分かれて輪奏する。 **題材のねらい**： ・歌ったり身体表現をしたりして、拍の流れを感じ取ったり、音高感を身に付けたりすることができるようにする。 ・階名で模唱や暗唱をしたり、これをもとに楽器で演奏したりすることができるようにする。	**《かえるのうた》を扱う学習次のねらい**： （記述なし） **題材のねらい**： ・様々な鍵盤楽器に親しみ、その音色や音の響きを感じ取って合奏すること。	**《かえるのうた》を扱う学習次のねらい**： ・階名唱に慣れ、楽器で演奏して楽しむ。 **題材のねらい**： ・階名唱に慣れ、楽器で演奏して楽しむ。 ・２拍子や３拍子の流れにのって、歌ったり身体表現をしたりして楽しむ。

学習活動	**1．導入** 教材CD6－39（One Frog, TwoFrogs, Three Frogs…Sing!のモンタージュ）をかけて、それぞれのかえるの鳴き声の違いに気付くことができるようにするために、思ったことや感じたことをはっきりと決められるように誘う。 **2．展開** **演奏** 教科書の拡大版（Big Book）を見せ、2匹のかえるが持っているもの（スーツケース）についての会話をさせる。そしてそのかえるたちがどこの国のかえるなのかを示しているスーツケースの国旗に注目させる。 教材CD6－41《The Frog Song》をかけて次のことをする。(2.3) ・2段目の「ゲロゲロゲロゲロ」というリズムパターンが聞こえたら手を挙げさせる。 ・CDで曲を全部聴きながら、このリズムパターンを言ったり合わせて手をたたいたりさせる。 ・CDなしで、ゆっくりなテンポでこのパターンを練習させる。 ・子どもたちの歌に合わせて、ギロやサンドブロック、トーンブロックを交替で演奏させる。 **歌唱** 子どもたちを次のように導く。 ・1段目の旋律にある小さな「山」を感じ取り、それを手を動かして表現させる。 ・教材CD6－41と一緒に歌わせる。 ・教材CD6－41と一緒に歌い、その後で教材CD6－40（日本語バージョン）と一緒に歌わせる。(2.2) **3．まとめ** **歌唱に対するアセスメント** **表現や観察によって** 《The Frog Song》を歌うことを通して、単純なリズムパターンを正確に歌えるようになったかどうかに注目する。	**● 音楽を聴いたり歌ったりして、階名唱することに慣れる。** ・挿絵のかえるを指さしながら範唱を聴く。 ・範唱に合わせて ♩♩♩♩｜♩♩♩𝄽𝄀 のリズムフレーズを手拍子で打ちながら楽しく歌詞唱をする。 ・階名模唱を繰り返して、暗唱できるようにする。 **● 拍の流れに乗って、歌ったり楽器で演奏したりする。** ・2つのグループに分かれて、始めの2小節を使ったオスティナートによる伴奏に合わせて、階名唱する。 ・旋律楽器でフレーズごとに分担奏をする。 **● 2つの組に分かれて、二部合唱を楽しむようにする。** ・全曲を通して旋律を演奏する。 ・先に演奏するグループと2小節遅れて演奏するグループに分かれて、輪奏を楽しむ。	**① 歌詞唱や階名唱をする。** ・歌って曲全体の感じを捉える。 **② 鍵盤ハーモニカで旋律奏をする。** ・指番号や指の位置替えに注意して、旋律奏をする。 **③ リズム伴奏の練習をする。** ・リズム伴奏がしっかりしていないと、合奏が成り立たないことを伝える。 **④ 合奏や輪奏をする。** **⑤ 輪唱をする。**	**①「かえるのがっしょう」を歌う。** ・歌詞で歌って楽曲の感じをつかむ。 ・階名で歌う。 ・「どれみの　たいそう」など体を使って階名を表しながら階名唱する。 **② 楽器で演奏する。** ・指づかいに気をつけて旋律楽器の練習をする。 ・2小節ずつ分担奏や交互奏をする。 **③「かえるのがっしょう」を歌ったり、楽器で演奏したりする。** ・歌と楽器を合わせたり、歌と楽器を交互に演奏したりする。 **④「なき声あそび」をする。** ・4分休符のところに入る鳴き声を工夫する。 ・歌グループとかえるの声グループに分かれて演奏する。 ・工夫した歌い方や鳴き声を発表する。 ・楽器の演奏も入れて、楽しく演奏する。 **⑤「かえるのがっしょう」でふしのおいかけっこをする。** ・4つのグループに分かれて歌でおいかけっこをする。 ・聴くグループと歌うグループに分かれて、互いに聴き合う。 ・旋律楽器でおいかけっこをし、音の重なりの響きを感じ取る。
評価	**アセスメント**： **<方法>**表現と観察。 ・正確なリズムで1つの簡単なパターンを歌うことができる。	**評価規準**： **音楽への関心・意欲・態度** **<方法>**活動の様子の観察。 ・楽しんで二部輪奏に取り組んでいる。 **音楽的な感受や表現の工夫** **<方法>**演奏の聴取や活動の様子の観察。 ・拍の流れを感じ取り、音の動きを意識して階名模唱している。	**評価規準**： **音楽的な感受や表現の工夫** **<方法>**発言や演奏の内容。 ・どんな演奏をしたいか、イメージをもって演奏している。 **表現の技能** **<方法>**演奏の内容。 ・リズムや指番号など、正しく旋律奏をしている。	**評価規準**： **音楽への関心・意欲・態度** **<方法>表情や体の動きの観察、リレー演奏。** ・階名やリズムに興味をもち、歌に合わせて自ら体を動かしたり、歌唱表現を楽しんだりしている。 **<方法>**声の出し方の観察・発表。 ・様々なリズムや掛け声、鳴き声を生かした表現を工夫している。 **<方法>**声の出し方の観察、発言の内容。 ・互いの歌声や楽器の響きを聴き合い、合わせるよさや楽しさを感じ取っている。

			<方法>演奏の聴取。 ・拍の流れに乗って、歌ったり楽器で演奏したりすることができる。				表現の技能 <方法>音の出し方の観察、演奏の様子。 ・範唱や範奏を聴き、リズムに気をつけて、器楽表現している。	
発展的・補充的学習事項	技能（Skills）	関連内容（Connections）	「発展的な学習」	展開例以外に示された学習活動	「発展的な学習」	展開例以外に示された学習活動	「発展的な学習」	展開例以外に示された学習活動
	「技能の補強」（SkillsReinforcement） キーボード（2.4） グワグワという言葉に合わせ、D音で弾かせる。 動きと読譜 かえるのパペットを作り、《Kaeru no uta》に合わせて上下させる。	「スポットライト・オン」（Spotlight On） かえるの鳴き声について（3.1） かえるの鳴き方や鳴き声のタイプ。 教師へのアドバイス（Teacher To Teacher） リズムチェーン（2.4） つながりや言葉のリズムによるつながり。 音楽を通した技能の向上（Building Skills Through Music） 算数（4.1） 歌詞や旋律に付けられている数を習得するために、それに合わせた動きで表現する。	・五線上の音の位置の把握。	（記載なし）	（記載なし）	（記載なし）	（記載なし）	（記載なし）
音楽用語	・パターン　・リズム		（記載なし）		・輪奏　・輪唱		・4分音符　・4分休符　・小節　・縦線 ・終止線	

では、目標に対するアセスメントを行うこととしている。

日本では３社とも、階名唱、旋律楽器による演奏、輪唱奏を求めている。《かえるのがっしょう》は多くの子どもが知っている旋律であることや、輪唱ができる曲として有名であることから、これらの学習のために相応しい教材として選択されているものと考えられる。またそれらに加え、東書は歌の伴奏となるリズム打ちを２部で行うこと[14]、教出は５～６小節の４分音符と４分休符が交互に表れる部分においてかえるの鳴き声を工夫して歌とつくった鳴き声のかけ合いをさせている。

３．２．８．　評価

「Making Music」では、「技能の目標」に対応して１点のみ「正確なリズムで１つの簡単なパターンを歌うことができる」（Sing a simple pattern with rhythmic accuracy）というアセスメント項目が示されている。アセスメントの方法は表現（Performance）と観察（Observation）による。またアセスメント項目の箇所には、「Skill:SINGING」という文字が強調ロゴを用いてマークされており、目標とずれないアセスメントを実行させようとする強い姿勢が感じられる。

日本では３社とも題材例と整合する観点別評価の評価規準を設定し、その方法とともに展開例の中で示している。そのことにより学習指導の過程でいつ何をどのような方法で評価するのかがわかるようになっている。《かえるのがっしょう》は表現領域の学習として扱われているので、観点ア「音楽への関心・意欲・態度」、観点イ「音楽的な感受や表現の工夫」、観点ウ「表現の技能」の評価規準を設定している。

３．２．９．　発展的・補充的学習事項

「Making Music」では、技能に関して２つの学習内容を掲げている。１つは、５小節目のリズムをキーボードの主音で弾かせること、もう１つは、かえるのパペットを作りそれを用いて音楽に合わせて上下させる活動である。前者はCMCSの2.4と対応することが示され、リズムパターンの知覚と技能をサポートするものであることがわかる。また後者は、旋律線の知覚と歌唱をサポートするものであることがわかる。

さらに、関連事項や他教科との関連に関するものとして次の３つが示されている。第１は、かえるやその鳴き声についての事柄である。かえるの鳴き声は水辺で聞けることや、湖や湿地に住むかえるや日本の沖縄の木に住むかえるなど、かえるによってそれぞれ違う鳴き方があることを情報提供している。このことはCMCSの3.1「日常の体験の中で、音楽のいろいろな使われ方がわかる」（Identify the various uses of music in daily experiences.）に対応している。

第２は、言葉のリズムに合った繋がりやリズムチェーンを使ってリズム伴奏を創ることである。これは、詩のもつリズム感を捉え、この曲の基本的なリズムをキープする技能を求める学習であり、CMCSの2.4と対応する。その具体的な指導方法は「Teacher to Teacher」に示されている。

第３は、算数と関連する学習活動である。《Kaeru no uta》の冒頭２小節の英語歌詞「One frog, two frogs, three frogs, hop!」に合わせ、まず音楽なしで第１グループが「One frog」の部分でジャンプし、続いて第２グループと第３グループがそれぞれ「two frogs」「three frogs」の部分でジャンプしていく。その後、音楽に合わせてそれを連続的に行う。この活動はCMCSの4.1に対応し、音楽と動きを通して数の概念を習得させようとするものと考えられる。

日本の３社では、学習指導要領を超えるいわゆる「発展的な学習」は、教芸で「五線上の音の位置の把握」を掲げている。児童用教科書には「ファとレの音ぷのいちはここだよ!!」として、高音部譜表における音符のたまの位置を教えている。これは中学年以降で行う視唱の先取りとして読譜と相対的な音程感に関わる学習を示しているものといえる。

３．２．10．　音楽用語

「Making Music」では、「リズム」「パターン」東書では「輪奏」「輪唱」教出では「４分音符」「４分休符」「小節」「縦線」「終止線」がこの学習で習得する音楽用語として示している。

４．　知　見

以上、「Making Music」と日本の教師用指導書において《かえるのがっしょう》がどのように扱われているかを明らかにした。そこから得られた知見を集約すると次の３点になる。

まず第1は、「Making Music」ではリズムとリズムパターンの知覚を基盤にしてそれを奏する技能を求めていること。日本では階名唱や輪唱奏、交互奏やオスティナートを伴う楽器アンサンブルとそれらを楽しむ学習が求められているということ。逆に言えば、どちらもそれらを学習するために適した教材曲として《Kaeru no uta》《かえるのがっしょう》が選択されていることがわかった。

第２は、「Making Music」には、音楽活動と統合させて他教科に関わる概念をも習得させようとする内容をもっていることである[15]。日本では小学校学習指導要領に音楽の文化的側面の内容理解が示されていないこともあり、表現領域では楽曲の演奏を中心とした授業が展開されている。《かえるのがっしょう》の授業においても、「Making Music」にあるような、かえるの鳴き声に対する表現の違いから諸外国との文化比較を行おうとする発想はない。

第３は、具体的な指導方法についてである。

「Making Music」では、リズムパターンを正確にたたけるための指導方法やCDなどの副教材を使用する場面、また子どもに語る話の具体的内容や語る場面などを詳細に示している。日本では３社とも、展開例や展開計画例の中には指導方法が明確に記載されていない。そのため教師は、そこに書かれている学習活動から指導方法を読み取ったり[16]、指導上の留意点や[17]、指導上の参考資料として掲げられていること[18]を指導の方法としたりしているのではなかろうか。

シルバー・バーデット社の音楽教科書は、かつてその編者でもあった音楽教育哲学者B.リーマー（B.Reimer）による「美的教育」（Aesthetic Education）を理念とし、そのためにコンセプチュアル・アプローチ（conceptual approach）によって概念学習を中心とするカリキュラムを打ち立てていた。例えば、1978年版の教師用指導書『Music』におけるカリキュラムのスコープは、音楽の諸要素に関する「音の表現的特質」「諸芸術」「音楽様式」「職業」からなっている[19]。しかしこの《Kaeru no uta》のレッスンにも見られたように、そこには概念や諸芸術（他領域との関わり）の学習を残しつつ技能の重視が求められているのには、やはりCMCSやその基となった1994年の「全米芸術教育標準」（National Standards for Arts Education）[20]の影響があったものと考える。

５．今後の課題　－第3段階に向けて－

この第２段階の作業によって、CMCSと学習指導要領に基づく指導内容や方法の具体を机上で知ることができた。続く第３段階は、加州における《Kaeru no uta》を扱う授業の分析を行う。また筆者らによって日本の内容と方法による《かえるのがっしょう》を加州で実践し、そこの現場の教師からその授業に対する評価も受けてみたい。またその逆も日本で行ってみたい。
さらに、第２段階では判明できなかった以下の点も明らかにしたい。

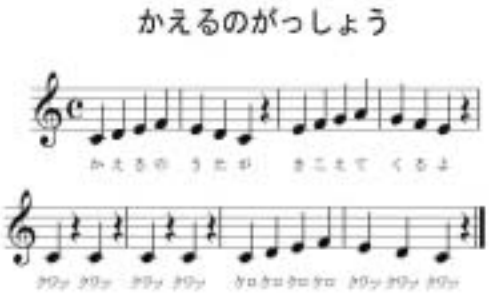
第１は、「Making Music」に示されたこの方法で、確かに目標到達まで導けるのか、という疑問である。様々な資質レベルの教師においてもこの内容を辿っていけば優れた授業が展開できるように編まれていることはわかるが、果たして現実はどうなのであろうか。また子どもの音楽的能力や民族性も様々である加州の公立学校において、教師は《Kaeru no uta》の指導にどのような工夫やアレンジをしているのだろうか。

第２は、《Kaeru no uta》があるユニット７のレッスン５にかける時間である。「Making Music」を見る限り、その内容を完全に遂行するためには少なくとも４～５時間はかかるのではないかと推測される。加州の多くの公立学校における音楽の授業時間数は、１回30分～40分の週１回程度であり、現在はさらにそれが縮減傾向にあると聞く[21]。そのような中で、「リズムパターンを正確に演奏すること」という目標がきちんと実現されているのかを確認したい。

第３は、アセスメントの具体的方法である。いつ、どのような方法で目標の到達を確認していくのか、これもまた「Making Music」に示されていることの他に行っている実際的な現実を確認したい。

註

１）例えば、2006年から５ヵ年計画で開始された日本学校音楽教育実践学会による「音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較研究」等。
２）国立教育政策研究所『音楽のカリキュラムの改善に関する研究－諸外国の動向－』、2003年、pp.7-13
３）60%のシェアという情報は、同書の著者の一人であるDavid Connorsカリフォルニア州立大学ロサンゼルス校教授から筆者宮下によるインタビュー（2008年６月２日）によって得た。
４）《かえるのがっしょう》の原曲はドイツ民謡の《Froschgesang》であり、日本では譜例１のような歌詞が岡本敏明によって付されている。また、『Making Music』では、《Kaeru no uta》（The Frog Song）という曲名で、「Children's Song from Japan」として掲載されている。英語の歌詞は以下の通り。
One frog, two frogs, three frogs, hop!
Can you hear their merry song?
Gwa! Gwa! Gwa! Gwa!
Gero, gero, gero, gero, gwa, gwa, gwa!



譜例１

５）検討箇所は、p.16、pp.36-53。
６）検討箇所は、p.15、pp.24-25、pp.54-63。
７）検討箇所は、p.15、pp.34-49。
８）検討箇所は、T14-T15、171c-171d、pp.182-183。
９）日本におけるシルバー・バーデットの音楽教科書に関する研究は、すでに小島（1982）（2004）、尾見（1983）、長尾（1983）（1984）（1993）（2000）、筒石（1988）、曹（2005）、西園（2005）、斉藤（2008）らが行っている（小島律子『音楽教育のスパイラル・カリキュラムにおける連続性と発展性－アメ

リカの音楽教科書指導書の分析を通して－」『大阪教育大学紀要』、第Ⅴ部門、第30巻、第３号、1982年、pp.133-146。小島律子「アメリカの小学校音楽科の教科書におけるカリキュラム構成」『教科書フォーラム』、No.２、中央教育研究所、pp.14-21。尾見敦子「アメリカの音楽教科書“Music”－美的教育としての音楽教育の内容と方法－」『人間発達研究』、Vol.８、お茶の水女子大学人間発達研究会、pp.24-31、1983年。長尾愛作「日米音楽教科書の比較研究－教育芸術社とSilver Burdett Company－」『宮城学院女子大学研究論文集』、59号、1983年、pp.71-90。長尾愛作「日米音楽教科書の比較研究（Ⅱ）」『宮城学院女子大学研究論文集』、61号、1984年、pp.131-146、長尾愛作「日米音楽教科書の比較研究（Ⅲ）」『宮城学院女子大学研究論文集』、77号、1993年、pp.95-118。長尾愛作「米国教科書に観る幼児教育音楽の指導内容」『鳴門教育大学実技教育研究』、Vol.10、2000年、pp.3-9。筒石賢昭「テクスチュア（TEXTURE）の観点から見た初等教育における歌唱教材の分析研究」『音楽教育学』第17‐２号、日本音楽教育学会、1988年、pp.24-32。曹念慈「教科書『Silver Burdett Making Music』の低学年の内容から諸芸術教科を統合する方法」『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要』17、2005年、pp.11-19。西園芳信『小学校音楽科カリキュラム構成に関する教育実践学的研究』、風間書房、2005年、pp.186-237。斉藤百合子「幼小連携からみた音楽教育の方法原理の比較－Silver Burdett『Music』の教科書分析を通して－」『研究紀要』No.８、常磐会学園大学、2008年、pp.43-57。）。しかし本研究は、日本との授業実践比較を目指す中の一方法として検討する点と、カリフォルニア版及びその最新の2008年版を用いることにおいてこれらの先行研究とは異なる。

10）2007年10月１日及び、2008年６月４日。

11）例えば、Unit１は「Let the Music Begin!」、Unit12は「The Joy of Celebration」。

12）Unit１～Unit６に示されている諸要素と技能は、表現（Expression）、リズム（Rhythm）、形式（Form）、旋律（Melody）、音色（Timbre）、テクスチュア/ 和声（Texture/Harmony）。

13）例えば、KのUnit７は「All About Me」、Unit12は「Celebrate with Me!」。

14）次の譜例２のリズム譜が子どもの教科書（pp.24-25）に掲載されている。

譜例２

15）この点については、前掲９）、曹（2005）が詳しく論じている。

16）例えば、「歌って曲全体を捉える」（東書）を「歌って曲全体を捉えさせる」と読み替えれば方法となる。

17）例えば、「歌の部分は楽器で演奏するなど違いがわかるようにする」（教出）。

18）例えば、「ふし遊びの活動」（教芸）。

19）前掲９）、西園（2005）、pp.197-209

20）「全米芸術教育標準」における音楽の領域は次の９つである。音楽の技能が重視されていることがわかる。①歌唱、②器楽、③即興、④作曲と編曲、⑤読譜と記譜、⑥鑑賞、⑦評価、⑧音楽と他の芸術・芸術以外の教科との関連性の理解、⑨音楽と歴史・文化との関連性の理解。

21）先述したDavid Connors教授や、Somis Union Schoolの音楽教諭、S.Murphy氏の談話より。